

北海道地理学会創立50周年記念 元会長へのインタビュー

柏村 一郎先生（1977～78年度会長）へのインタビュー

インタビュアー 大内 定

大内：今日は、創設の頃の経緯をお伺いしたいと思います。北海道地理学会の前に、地理学研究会というのがあったそうなのですが、よく分からぬもので。これは戦前の師範学校の時代から続いているものなのでしょうか。

柏村：いや、それは私にも詳しくは分かりません。私が1949年4月に、北海道立の網走高等学校から札幌の女子高校（府立高女、今の北高）に転勤してからのことを中心に申し上げます。その頃、まだ師範学校だったんです。男子の師範学校には、当時地理の先生がいなかったんですが、私が札幌に来る1年前に、気象台の方から奈良部君が札幌の第二中、今の西高ですが、あそこに来たんです。奈良部君と私は東京師範、文理大の同期だったものですから、そのときに会っているんです。

その頃に、高校には男子校・女子校とありましたが、全国的に小中高と男女共学にするべきだという動きがあったんです。当時、各地に進駐軍の軍政部というのがあったんですが、北海道の軍政部長のニブロという人が男女共学の推進者だったんですよ。実は、この男女共学の実現が、北海道地理学会の背景の一つになります。つまり、北高・西高・南高・東高の校長や先生方が、共学問題に関してお互い協議することになったわけです。この時に、西高から奈良部君が出てきて、北高から私が出てきた。南高からは宮崎芳男先生でした。東高は地理の先生ではなかったのではっきり覚えていません。それで、こういう話をするには、まず地理・歴史に詳しい人、特に地理の人がふさわしいということで、我々が集まって協議することになったんですよ。

それでね、もう一つの系統に、在来のほうで師範の関係があるんですよ。師範のところで「札幌地理研究会」があったんです。この地理研のときに知ったのが森壽美衛先生です。この札幌地理研

究会は不定期のものだったんですが、その時は共学の問題とあわせて地理の勉強会をやるというものでした。

大内：いつぐらいからこういう活動をされてたんですか。

柏村：それがおそらくこの前からあったと思うんです。よく分からないのですが、戦後すぐに、誰かの講演会という形で地理研究会というものが開かれたんですよ。これが、後に北海道地理学会創設の一つの核になっていく。

大内：このころは北大には地理がなかったからですか。

柏村：北大にも地理の先生はいましたが、この頃はまだ顔を出していなかった。ですから、地理研の構成は札幌師範が中心でした。そして、二中から奈良部君が来ることになります。また、森先生と一緒に沼田君も来ていました。つまり、師範の頃に知り合った人たちと、文理大出身の私たちが中心でした。そして、北大との関係は、農学部の高倉新一郎先生が加わるという形になります。

大内：高倉先生が加わるというのはどなたかとツテのようなものはあったんでしょうか。

柏村：あったと思います。その後、地理研には、文部省が関わってくるんです。この時に一緒に付き合いした人は、福井英一郎、岡山俊雄、中野尊正といった方々です。

大内：そうそうたるメンバーですね。その後、高倉先生が顧問になるわけですね。

柏村：そうです。それで、昭和25年の4月に北大農学部に行って、そこで「地理委員会」というのを開いているんです。地理委員会というのは、東京の方から各地に向けて色々な会合をやって欲しいという依頼がきたらしくて、北海道では北大が窓口になった。ところが、北大の地理は当時教養で、学部として存在している農学部が窓口

になったわけです。そこで地理にも縁がある高倉先生が引き受けて、農学部で地理委員会というのを開いたのです。当時、日本地理学会には地方支部がなく、研究領域の拡大を意図して、地方でも委員会のようなものを開いて欲しいということだったようです。

この当時、北海道が日本の将来の食料基地を担うと期待されていたので、泥炭地域の開発問題を取り上げました。また、美唄原野と篠津原野で政府が開発をやるということで、そこも調べて欲しいと依頼があり、滝川高校の宮田校長に頼みに行ったり、現地の方では河原孝雄先生に案内を依頼したりしました。昭和25年6月になると、当時できたばかりの学芸大に集まって、「地理調査会」というのを開いて、泥炭地についての議論をしました。調査会では、名古屋大学からの渡辺操さん、地理研究会からの森壽美衛さんを中心に話をしました。そして、今度は9月になりますと、「人文地理委員会」というのが開かれるんです。ですから、しおりゅう名前が変わったんですよ（笑）。

大内：ちょうどこの頃、国土地理院の中野先生が北海道の担当ですね。

柏村：そうです。このときは国土地理院の方を中心にして開催しました。このように、東京の方から誰かが来るという形で集まって、そのたびに名前が変わっていました。

大内：この頃になって学会の創設の話が出るわけですね。

柏村：ええ。それで、泥炭地域の開発状況を地図に投影するという仕事をやって、その発表会を12月7日の午後1時に行うわけです。場所は宮崎先生がいた道立教育研究所です。

大内：これが北海道地理学会の第1回総会ということになる。

柏村：ええ。そして、そのときに文部省から文部事務官の保柳睦美という先生が来まして、北海道地理学会を形成しようということになるんです。

大内：ということは、保柳先生が、このような色々な委員会をまとめられたということですか。

柏村：ええ。それで、12月7日に北海道地理学会の結成が決定されて、会則作成などの準備を行って、22日に道立教育研究所で発会式をやった

んです。このときも保柳先生が来ました。そして、役員も決まって、初代の会長が森壽美衛さんになったわけです。

大内：当時の幹事が柏村先生ですね。

柏村：ええ。幹事会は26日に、やはり教育研究所で開きました。要するに、12月7日は会則の準備段階で、総会ってほどのものではなかったわけです。

大内：ただ、会則の最後の附則には、昭和25年12月1日からの施行となっているんですね。

柏村：ええ。実際できたのは発会式のときですが、いつから施行かといったときに12月1日にしたんですよ。このようにいろいろ伏線があったわけですが、学会創設には、師範学校の関係者たちと、われわれと、北大の農学部の人たちが集まって、そこに文部省の東大出身の人たちが入ってきてバックアップするという形だったわけです。結局、最初の段階で、男女共学という問題を通じて、各学校がばらばらにやっていたことがひとつにまとまるという機運が生じたわけですね。そこにいろいろな人が関わると同時に、北海道開発という点で東京の人たちも興味を示して、北海道にも組織が必要だということで文部省までもが関わった。

大内：会の発足という点から言うと、必ずしも当時の師範学校が中心というわけではなくて、札幌におられた先生方や国土地理院なんかも関わっていたんですね。

柏村：そう。北大の人もバックアップしていたからね。教育現場が中心になっていたことは確かですけど、「北海道地理学会=教育大」というわけではなかった。

大内：学会創立から、ずいぶん開かれたものであったわけですね。

柏村：そうですね。また、食料基地としての北海道開発も注目された時期ですから、実際の開発とかなると、学校の先生だけでやっていけるものでもないですから。

大内：そうですね。最後に、柏村先生が会長をされていた1977~78年ごろのエピソードみたいなものはありますか。

柏村：もう、そろそろ次世代への引継ぎというのを考えていましたよ。支部や何かの問題もあつ

たから。ただ、小・中学校で地図研究会とかがばらばらに形成されていたんですが、それらを合併するという目論見は失敗しました。ひとつは、学会という名称がアカデミックに聞こえすぎるというのがあったのでしょうかね。地理教育といっても、小学校の先生方は尻込みする人が多かったですから。

大内：沼田先生が会長の頃、地理教育のシンポジウムを開いてまとまったこともあったのですが、その後はまた、ばらばらになってしまいました。

柏村：やっぱり広い範囲でやって、いろんな人に関心を持ってもらう必要があります。その意味では、シンポジウムなどを活用して、ばらばらにやっている人たちがそれぞれの角度から話し合いをする場を設けるようなこともやっていく必要はありますね。

大内：そうですね。10年に1度、大々的にやるものもいいのですが、2年に1回くらい小さなものでもテーマ別のものをやるという形は必要かもしれません。今日はお話をいただきましてありがとうございました。

沼田 武先生（1983～86年度会長）へのインタビュー

インタビュアー 大内 定

大内：沼田先生からは、2年くらい前に、会誌の古いものをいただいたんですよ。先生は第1号から35号までをきちんと揃えていらっしゃって、学会の方には15号くらいまではなかったものですから、先生からいただいてちょうど揃ったということなんです。

沼田：私のところにあってもどうにもならないので、差し上げたんですよ。

大内：私の見るところでは、学会の記録、たとえば幹事会の内容を綴りにしたものとか、そういう資料は、1972年くらいよりも前のものは、もうないみたいなのです。そういう意味では、いただいた会誌で、すべての号が揃ったことは貴重です。これを見ると、先生は学会の創設のときから会員ですよね。第1号にお名前が載っていました。所属は苫小牧東中学となっています。

沼田：そうです。そこにいるとき、最初の会長の森壽美衛先生が苫小牧高女、今の苫小牧西高校の校長だったんです。それまで私は追分の安平というところの小学校にいて、生徒と一緒に安平というところがどのようにしてできたのかという歴史の調査していたのです。そこに、森先生がやはり調査に来られて、小学校に寄られたんです。そ

れが森先生と私の出会いでした。私は、森先生も同じようなことをされているんだなあと感じて、すっかり意気投合しました。それから、昭和27年くらいですかね、森先生は苫小牧から、今の岩見沢の教育大学へ行かれました。亡くなったのは昭和30年ですね。

大内：学会を創設されたメンバーの中で、森先生が初代の会長になられたんですね。その頃は、教育大でいえば、師範学校から新制大学になったばかりですが、大学の方にも地理学会の創設の動きというのはあったのでしょうか。中心に動いた方はどのような方がいらしたのでしょうか。会誌を見ると、会長・副会長以外に59人で発足しているようです。昭和25年12月7日に設立総会というか、発起会を開いて会則を決めていて、昭和25年12月1日から実施するということになっています。

沼田：私もはっきり記憶していませんが、私は田中秀作という先生が旭川から来られていて、この方のことは良く覚えているんですよ。札幌でよく会合があったんですが、田中先生以外はほとんど覚えていない。初代会長の森先生は、苫小牧に来られる前はどこかで視学官というんでしよう

か、今でいう教育委員会関係の仕事をされていたと聞きましたが、こうしたことに詳しい方はもういらっしゃらないでしょうね。

大内：北海道地理学会とは別に、沼田先生を中心となって創立された札幌地理サークルについてもお聞きしたいのですが。

沼田：あれは、単位の制度が変わって地理が必修になったはずなんですが、その頃です。確か、昭和38年から必修になるというので、どうやって教えればいいのか私一人では分かりませんでしたから、何人かで色々話し合ってみたいということで呼びかけをしました。最初は7～8人でしたが、それでサークルを作って、今でも続いているというわけなんです。退職するまで20年ほどお世話を引き受けました。最初の頃は、お茶を飲みながらの打ち合わせ会みたいなものだったのですが、それをずっと続けていこうということやってましたね。

大内：北海道地理学会のほうに戻りますが、学会創設のときは60人くらいのメンバーでしたが、メンバー数の推移を見ると、1970年頃に大体100人くらいになって、1974～75年で120人程度ですね。その後あまり変化せずに、沼田先生が会長を務められた1983～86年くらいに、120人から約150人に規模が拡大しているんです。その4年間で。私の記憶では、高校の先生はもとより、いろいろな方に声をかけられて会員が増えたのではと。

沼田：私自身はね、中学なり、高校なりで、地理を教えるうえできっちりとした知識を持っていなければならぬと思って、それで、何も北海道地理学会は大学の先生だけじゃなくて、やっぱり高校・中学でもやっていることは同じだろうと。やっていることは地理教育かもしれません、やっぱり基礎的な勉強は普段からしておかないといけない。それで、できるだけ会に入って話を聞いたり、自分で発表したりということは必要だろうと思ったんですよ。ですから、できるだけ多くの人に声をかけなきゃと思っていましたが、会員数が増えたかどうかまでは記憶にありませんでした。

大内：本当にその時期で大きく増えましたね。その後は、今まで微増ということで、今は180人くらいとなっています。会員数の伸び悩みの要因

は、教育現場の忙しさとか、高校で地理が必修から外れたことなどがあると思います。入会する小・中・高校の若い先生が少なくなっている。

沼田：それとは別に、みんな外に出て話し合ったりすることがだんだん少なくなってきたのではないかでしょう。名前だけ加わっていても、いろんな会合に全然出てこない人が増えてきてるんですよ。

大内：「地理セミナー」の方も若い人が入らずにメンバーが少なくなって、会を開くことも少なくなっているのですが、札幌地理サークルはメンバー数を維持していますよね。それで、先生が北海道地理学会の会長をされてからは、地理サークルとの共催をしたりすることもありました。

沼田：研究しようという姿勢は同じですから、一緒にやろうというのがあってもいいんじゃないかなと思いましてね。何年ごろからかは忘れましたが、巡査なんかも一緒にやっていましたよね。

大内：このところは、2～3年おきくらいに、秋の巡査は共催という形でやっています。北海道地理学会としても、シンポジウムや講演会の開催など、工夫が必要だと思うのですが、なかなかうまく行きませんでした。今回、創立50周年記念ということでシンポジウムを開催したんですが、それより以前となると、先生が会長されていた頃までさかのぼります。先生の会長の頃には、1983年に「北海道の産業の諸問題」というテーマで1回あります、1986年にも開催しています。1986年度のシンポジウムでは、柏村先生をオーガナイザーとして「地理教育」をテーマに大学・高校・中学・小学校、それぞれの学校における地理教育の現状と問題についての報告と議論が行われたわけです。先生が地理教育に携わっていらっしゃったことが関係していたのではないかと思います。

沼田：経緯についてはよく覚えていないのですが、地理教育に関わっている人が大部分だったので、そういうことも必要だと考えたのでしょう。

大内：これ以外に、北海道地理学会について、会長をされていた頃の思い出とかエピソードは何かありますか。

沼田：いやあ、私は何も考えずに皆さんについていたというだけでした。

大内：私の先生に対する印象としては、新聞を

見て毎日記録されている札幌市の気温について、懇親会などで紹介しながら、いろいろコメントをなさっていたことを思っています。データとしても非常に貴重だと思います。また、スキノの商店街についても『北海道地理』に書かれたものを見出します。

沼田：気温については、自己流なので資料的価値はありませんが、今でも北海道17ヶ所の記録はつけています。地理サークルでも紹介したりしています。まあ、私のやってきたことは、大きく分けると、地理教育、集落、気候の3つということになりますね。

大内：最後に、先生のほうから今の北海道地理学会に対して思うところやアドバイスなどがありましたらお願ひします。

沼田：いやいや、私の方からは何も言うことはありません。できるだけ出席はしたいと思っていますが、大それたことは言えません。ただ、お世話になっているだけです。

大内：そうですか。今、北海道地理学会はいろいろな意味で転機を迎えていると思います。なにか新しい方向も考えていかなければと思っていました。今日はどうもありがとうございました。